

【学校教育目標】豊かな心と知性にあふれる、心身ともにたくましく生きる児童の育成

【学校経営の重点】学校教育目標の達成に向けて、教職員が一体となり、子どもが「自分を、学校を、地域を誇りに思う」活力ある学校づくりに向け、「考える子ども」(知)「やさしい子ども」(徳)「すこやかな子ども」(体)のバランスのとれた児童の育成をめざす。

1. 基礎基本の定着と思考力の育成
2. 学校教育活動全体を通じた豊かな心(友愛の心)の育成
3. 運動に親しむ意識と健やかな体の育成

【児童の実態】○国語科の研究3年目の今年度は、考えを整理・共有するための可視化の工夫をすることで、子どもたちが互いの考えを広め、深めることに寄与することが分かった。○自分の考えを論理的に説明し、子ども同士で練り合いながら理解を深めていける力を付ける必要がある。○読解力が弱いため、問題文や課題の内容の把握ができない児童がいる。○個人差は大きい。学年や教科によっては、下位層が多い。○家庭学習の習慣が定着していない児童もいる。○通常学級で、支援が必要な児童がいる。

取り組みの評価内容		1学期自己評価	2学期の取り組み
1. 個に応じた指導の工夫	○単元末テストの年間平均点を、全学年85点以上、かつ60点以下を5%未満にする	理科のみ達成	教育用タブレット端末の効果的な利用。具体物の操作、個別指導、個別教材、音読、視写、辞書引き、条件作文の練習、学んだことをまとめる新聞づくりなど実態に応じて取り組む。
	○各種学力調査(4・5・6年)全国・大分県全項目平均以上	5年生(国・算・理)算・理の県平均以上達成 6年生(国・算)算の県平均以上達成	言葉の特徴や使い方、分度器の使い方について再度復習をする。文章から分かったことだけでなく、考えたことを適宜言わせていく。
	○個に応じた指導の工夫(習熟度別学習、教科担任制、南小タイム、青○100点の取組等)	教員回答94.3% 4年生以上で習熟度別学習、教科担任制を実施	青○100点の取組を継続する。国語は「αドリル」で読解力、算数は、「スイッチ・オン」で基本問題と活用問題に取り組む。個の実態を把握し、単元ごとに学習内容に応じた指導形態を工夫する。
2. 教員の授業力の向上	○「学校の勉強がよくわかる」児童90%以上	児童回答88.6%で目標は未達成	習熟度別の指導やICTの有効活用などの工夫により「分かる授業」を目指した授業力の向上と、低学力児童への個別指導に取り組む。単元末テストで定着状況を把握する。
	○課題設定や可視化の工夫をした「考えをもつ」場の設定で、「考えが書ける」児童85%以上	「課題設定や可視化の工夫」教員回答89.2%「考えが書ける」児童回答85.1%で目標達成	板書、思考ツール、教育用タブレット端末なども含めた可視化の工夫を知り、積極的に授業で活用していく。
	○新大分スタンダードを基本にした「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」を位置付けた1時間完結型の授業展開	授業者全員が同じプレートを活用、書く活動を2回取り入れる	学力向上研修で新大分スタンダードを基本とした授業や板書・ノート指導を行い、授業力を高める。「めあて」と「振り返り」、「課題」と「まとめ」の呼応。8つの学習規律の徹底の確認。
	○校内研修への主体的な取組と授業公開	授業公開を年に1回は行う(2・3学期)	学年部5分間研修、国語科タイムの導入で指導の共有を図る。互見授業を積極的に参観することにより、授業技術を高めていく。
3. 小中一貫教育の推進	○新版「家庭学習のすすめ」の定着(学年×10分+10分)に取り組んでいる児童85%以上	児童83.2% 保護者79.4% 教員79.4%	学級懇談や学年通信で家庭への啓発を行う。児童版「家庭学習のすすめ」によるガイダンスと音読カードなどに学習時間の記録をし、時間と取り組み方を意識させる。
	○読書の量と質の向上「すき間読書に取り組んでいる」児童95%以上	児童回答84.2%で目標は未達成	自分読みの工夫で読書タイムを充実させる。様々な本を読むことでの読解力・語彙力の向上。
	○豊府小や南大分中との連携、情報交換による共通した取組の実施	8月までに2度、南大分中で情報交換実施	児童のメディアに触れる時間や家庭学習の取組の実態の共有、タブレット端末を活用した家庭学習の紹介。ネットモラルや持ち帰りルールの一貫した指導。